

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：鯖街道の起源）

鯖街道という交易路の起源

鯖街道（鯖の道）は、日本海と古代の都であった京都を結ぶ、様々に分岐した交易路のネットワークの通称です。この名前は江戸時代（1603 年～1867 年）に使用されるようになりましたが、この道自体に 1000 年以上の歴史があることは、考古学的な発見や古代の輸送の記録によって証明されています。

古代の古墳での考古学的発見

若狭地域を貫くこの道沿いには、鍵穴の形をした古墳（古墳）が数多く点在しています。特に上中地域は、そこで見つかった 5～6 世紀の古墳で有名です。発掘調査で発見された副葬品にはアジア大陸のからのものも含まれており、日本海沿岸の港ではすでに海外との貿易が行われていたことや、首都への交易路が確立されたことで内陸への輸送が容易になったことを示しています。いくつかの古墳は、若狭から天皇や朝廷へ食料を供給する任務を負っていた一族である膳臣^{かきわでのおみ}に関連しているかもしれないと見なされています。

若狭国の朝廷への食糧の供給

若狭国はかつて、御食国^{みけつくに}という朝廷への税の一部を食糧で納めなければならない地域だったため、食料の出荷が行われた。現在の奈良県にかつてあった藤原京^{ふじわらきやう}（694 年～710 年の都）と平城京^{へいじやう}（710 年～740 年と 745 年～784 年の都）の発掘調査で、若狭からの木製の荷札が発見されました。その荷札には、出荷元の地域、その荷に関連する税の支払い、荷に含まれていた食品の種類、などの情報が含まれています。今でも判読できるそこに刻まれた文字の例としては、塩、そしてイガイや鯛などの海産物などがあります。このように、鯖街道という交易路が鯖で有名になるずっと前から、他の貴重な食料品が同じ道を通して若狭から奈良、そして後に京都へ運ばれました。